

むかし、ある旅人が、ひとりのお坊さんに会いました。旅人とお坊さんは、あれこれ話をしながら、道を歩いていました。とつぜん、お坊さんが、田んぼで田植えをしている人たちを指さしていました。

「あそこに、人間は何人いると思いますか」

旅人は、田んぼをながめました。数えきれなくて、

「たくさんいるじゃありませんか」と答えました。お坊さんは、

「本当の人間は、ひとりしかないんですよ」といいました。

「あんなにたくさんいるのに、ひとりしかないなんて、どういうことです」と、旅人がきくと、お坊さんは、

「これをあなたの目に当ててごらんさい」といって、自分のまつ毛を一本抜いて、くれました。

旅人が、まつ毛をかざして、田植えの人たちをあらためてながめると、ひとりだけが人間で、あとは犬やうさぎやひつじやぶたや、馬や牛でした。そして、隣にいるお坊さんは、大きなとらだったのです。

旅人が驚いていると、とらのお坊さんは田んぼに走っていきました。すると、犬もうさぎもひつじもぶたも、馬や牛も、驚いて逃げ出しました。ただ、ひとり、小さな男の子だけが人間で、その子は、鎌をにぎって、とらに向かっていきました。とらは恐がって、まつしぐらに山へ逃げていきました。

旅人は、まつ毛を目からはなしました。

まもなく、犬やうさぎやひつじたちは、みな人間にもどって、かくれていた場所からのそのそ出てきました。そして、田植えを始めました。

旅人は、旅を続けました。しばらくすると、山奥へ逃げていたとらが、もとのお坊さんのすがたで、のっそりのっそり山から下りてきました。旅人とお坊さんは、またおしゃべりを始めました。

旅人はお坊さんに、

「あなたはどこまで行くんですか」とたずねました。すると、お坊さんは、

「山神さまの命令で、子犬をいっぴき食べに行くんですよ」といいました。

「その子犬は、どこにいるんですか」と、旅人がたずねると、お坊さんは、子犬のいる家のある場所と子犬の名前をいいました。旅人は、それが、自分の兄さんの娘だとわかって、びっくりしました。

「なんですって。それはわたしの兄の娘です。どうか食べないでください」と、旅人は大きな声でいいました。お坊さんは、

「それはだめです。お気の毒ですが、山神さまの命令なんです。しかたがないとあきらめてください」といいました。それでも、旅人は、何とかして助けてやりたいと、一生懸命たのみました。すると、旅人はいいました。

「では、こうしましょう。今夜、娘さんは、部屋から一步も出てはいけません。部屋の障子を開け放し、床にむしろをしいて娘さんを座らせ、すぐそばにろうそくを立てておいてください。わたしは、火が恐いので近づけません」

旅人は、すぐに兄さんの家に行って、お坊さんの話をしました。みんなはおどろき、夜になると、娘をむしろに座らせて、ろうそくをともし、寝ないで見守りました。

おかげで、娘はとらに食べられずにすんだということです。